

# ハフントンポスト

## ブログ

第1回 2014年6月1日

### ——「介護保険」は誰をしあわせにした？——

はじめまして！

兵庫県西宮市で「つどい場さくらちゃん」という〈つどい場〉をしています、まるちゃんです。〈つどい場〉って何？とよくきかれるが、介護受ける本人・介護者・介護職・医療者・行政・社協・議員・大学教授・学生・地域活動者・子ども・子育て中のママ・マスコミ関係者・・・立場を越え、誰でもがごはんを食べながら想いを吐き出し、情報交換の場。気がつけば11年目になります。

核家族化が進み、家族の「介護」をひとりで担う家庭が多くなり「介護」の社会化というふれこみで始まった「介護保険」が14年目になります。

自分の身近に「介護」が無ければ、自分の身に降りかからなければ、「他人ごと」でも、みんな、40歳から「介護保険料」は徴集されていますよね。（市町村で金額は異なりますが全国平均でスタート時は月額¥3000だったのが、今年は¥5000に）お元気だった親御さんの介護が始まったり、「若年認知症」として介護対象になる方々が40代、30代になってきている現実・・・自分が「介護者」になったり、「介護」を受ける身にならない保証はないです。

自分が介護してきた体験、そして「つどい場さくらちゃん」での〈出会い〉の中で学ばせて頂いたことを伝えたいです。

「介護保険」がスタートして大きく変わったことが2つあると思います。

☆「介護」の「福祉」が「産業」になり、家族のお任せ体質を増長

「介護保険」が始まるまでは、「介護」は家族が引き受けるしか無かった「在宅介護」が当たり前・・・ただし国による支えるシステムがあった。脳疾患等で入院すれば在宅で生活できるように本人、介護者にリハビリを日数かけて出来るように指導、（入院日数も長く可能）それでも無理なら「介護老人保健施設（老健）」で3か月ほど在宅復帰のためのリハビリ強化、介護者も習う。保健師が在宅に家族のサポートに来てくれていた。

「介護保険」が始まると、ほぼ、「事業所」に属する「ケアマネジャー」が誕生し、「お任せ体質」に拍車。本人の意向より家族意向重視。「計算屋」になって「施設」に捨てるを勧める。「福祉」が「産業」に変貌。全国で言えば、「良質」な施設、「良心」を持つ

「介護職」はいます。しかし、「現場」に居ない、「職員」の教育にカネと時間をかけない「介護」を「作業」に終わらせ、腐らせている〈経営者〉がはびこり過ぎ。「企業努力」を

せずとも「介護保険料」からの収入に倒産の危機感なしという特殊な業界。(介護給付金は当初の2, 5倍に)

☆ 街から、家から高齢者が消えた。

昔から「年寄り」は居ました。年相応に“ボケ”て家の中で這いまわり、手掴みで食べ、近所の市場に公園に「年寄り」はしゃべってました。

「介護保険」がスタートすると午前9時代と午後4時代に「送迎車=拉致車」(本人が選んで、悦んで行ってるわけでない)が街中走り回り「安心」「安全」を謳う「介護施設」に送り込まれ、歩けるひとも転倒を恐れ、車イスで過ごされ自由が無い、声かけもない。

15・6年前、自分の介護中、ボケた父を車で(初心者・身障者マーク付き)であちこち連れまわしましたが、サポート無しの「旅行」はあきらめてました。「つどい場さくらちゃん」を始めた11年前から「車イスのひとたちと行く北海道の旅」へ、「カニツアー」へ「イチゴ狩り」へ。本人・介護者・介護職・医療者と共に行く旅は笑顔だらけ。

「介護」受けてても普通に電車に乗り、普通にお店で食事をし、楽しむ権利はあります。

さりげないサポートをする「にんげん」がいれば。

誰も、自分の「人生設計」の中に「介護」をする「介護」を受けることは入っていないのではないのでしょうか。ボケてゆくこと、脳卒中、ガン、交通事故・・・どういふかたちでもひとりでは生きてゆくことが出来なくなった時、サポートしてくれる“ひと”がいる。ネット社会の中で、マニュアル化できない「個別性」が「介護」「医療」であり、<待つ>ことを一番要求される世界だと思うが、「介護保険」がビジネスといわれるように「福祉」を変貌させ、地域、家族関係を断ち切り、本人がもっと不安に、家族もオロオロし、こころある介護職を潰し、

「介護保険」は誰をしあわせにしたのだろう？

逃げないで「介護」と付き合うと深い・・・<人生>そのものなのに。